

古文に親しみをもたせるための教材の工夫

長期研修員 森村 祐三子

Morimura Yumiko

要 旨

高等学校学習指導要領の改訂によって、古典では「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導」が強く求められている。そこで、本研究では、古文に親しみをもたせるため、生徒が主体的に学べる古文教材を工夫し、授業実践を行った。その結果、古文の学習に興味をもたせるという点において、一定の効果が見られた。

キーワード： 興味・関心に応じた教材、導入教材の工夫、主体的な学び、古文作品のデータベース

1 はじめに

平成18年に改正された教育基本法では、その前文に「伝統を継承」することを掲げ、教育の目標として「伝統と文化を尊重する」（第2条5項）ことを挙げている。この教育基本法の趣旨を受けて、平成20年1月17日に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」でも、「我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育」の必要性を挙げた上で、特に古典の指導については、「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導」が、強く求められている。その結果、平成21年3月に告示された高等学校の学習指導要領では、「言語文化に対する関心」を深めることが重視され、「国語」はもとより、「古典」の重要性が強調されている。

しかし、奈良県の生徒の現状については、近年（平成20－22年度）の全国学力・学習状況調査の結果からも分かるとおり、例えば中学3年生では、学力調査の平均正答率は、平成22年度が同率、その他の年ではすべて全国平均を上回っているが、「国語の勉強は好きですか」等の「関心・意欲・態度」に関わる調査結果では、全ての年で全国平均を下回っているという状況である。

さらに、奈良県における「高校生の学校生活などに関する意識調査（平成21年2月）」によると、学校での「授業の進め方」について、重要だと考えている生徒の割合が92.7%と非常に高いにも関わらず満足度は60.5%に留まっている。中でも、「興味・関心に応じた学習」に対する満足度は56.9%、「個々の理解度に応じた学習」に対する満足度は40.7%であり、学校での授業が「理解できている」と答えた生徒の割合は34.6%となっている。

これらのことから、古文の指導においても、生徒の興味・関心に応じた教材を使用し、個々の理解度に応じて学習を進めることが古文への興味を深め、親しみをもたせるのではないかとの仮説のもとに、本研究を進めることとする。

2 研究目的

高等学校での古文の学習において、生徒の好き・嫌いの理由や興味の対象を探り、彼らが興味・関心を抱くような魅力ある教材の工夫と授業の展開方法を工夫することで、古文に対する興味を深め、親しみをもたせる教材について考察する。

3 研究方法

- (1) 国語（古文）に関する意識調査の実施と結果の考察
- (2) 教材の工夫
- (3) (2)の教材を用いた授業の展開例と授業実践
- (4) 授業後のアンケート調査の実施と結果の考察

4 研究内容

生徒が興味・関心を抱く教材を工夫するために、まずは、高校生の「国語（古文）に関する意識調査」を行った。そして、その結果を考察することで、生徒の興味・関心に即した、より実際の教材の工夫や授業の展開方法を考察する。

(1) 事前の意識調査

ア 調査の趣旨

国語（古文）に対する生徒の意識調査を実施し、生徒の好き・嫌いの理由やどのような内容に興味・関心をもっているかを探ることを目的とする。

イ 調査実施学年

県内公立高等学校第1学年～第3学年

ウ 調査実施期間

平成23年6月13日～平成23年6月30日

エ 調査内容

高校生の「国語(古文)」に関する意識調査

オ 調査対象

北部と中・南部の両地域、また、普通科と専門科の両科から、県内公立高等学校5校を抽出した。さらに、各学校で、対象学年の全学級からそれぞれ2学級を任意に抽出してもらい、その学級の全生徒を調査対象とした。（有効回答数：1156名）

カ 調査結果と考察

まず、「『国語』が好きか」という問いに対して、「好き」または「どちらかといえば好き」と回答した生徒の割合は57%、また「『古文』が好きか」という問いに対して、「好き」または「どちらかといえば好き」と回答した生徒の割合は31%とい

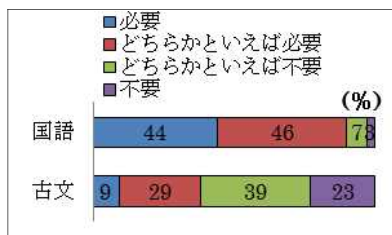


図2 要・不要の意識
った。(図2)

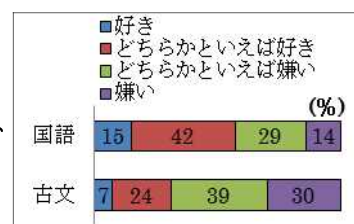


図1 好悪の意識

う結果であった。(図1)

それに対し、「『国語』の学習が必要だと思うか」という問いに対して、「必要」または「どちらかといえば必要」と回答した生徒の割合は90%、また「『古文』の学習が必要だと思うか」という問いに対して、「必要」または「どちらかといえば必要」と回答した生徒の割合は38%という結果であ

これらの結果より、9割の生徒は、国語に対する好悪の意識に関わらず、国語の学習は必要であると考えているのに対し、古文に関しては、7割近くの生徒が嫌いな上、6割以上の生徒は、古文の学習が不要であると考えているとの意識が明らかになった。これは、「古典」の学習が重要視される昨今において、大きな問題点であると言える。

そこで、「古文」に関する意識を更に詳しく見てみると、まず、「好きな理由」として、「作品の内容(32.8%)」や「古人の生活や考え方(23.9%)」に興味があるからと回答した生徒の割合が、合わせて6割近くに上った。反対に、「嫌いな理由」としては、「古い時代の言葉遣い(27.3%)」や「文法(23.5%)」に興味がないからと回答した生徒の割合が、合わせて5割に上った。(図3)

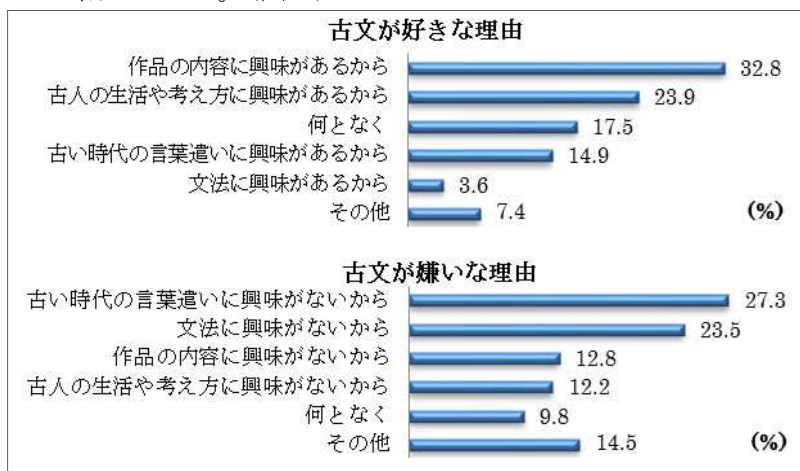


図3 古文に対する好悪の理由

また、その他の回答には、古文の「難しさ」や「わかりにくさ」を嫌いな理由として挙げる回答や「実生活に役立たない」等、古文が現代の生活に直接結びつかないことを挙げる回答が複数見られた。

つまり、半数以上の生徒は、「古語」や「文法」といった言語事項に関する部

分が嫌いとしており、古文を「理解するための基礎的・基本的な知識・技能」に過ぎない部分に、つまずきの一因があると考えられる。

次に、古文の学習の「要・不要」の理由について尋ねると、「必要と考える理由」として一番多かった回答が「受験に必要なだから(24.9%)」という実益型の理由であり、次いで多かった回答が「現代に、伝統的な文化を学ぶ必要があるから(24.3%)」というものであった。

反対に、「不要と考える理由」としては、48.5%と約半数の生徒が「社会に出て必要ないから」という理由を挙げており、次に多かった「昔の言葉なんていまさら関係ない

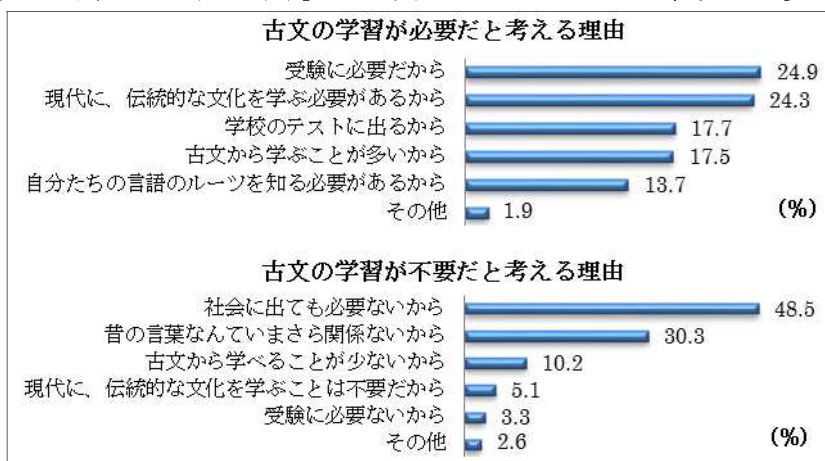


図4 古文の学習の「要・不要」の理由

から(30.3%)」という回答と合わせると、8割近くの数に上る結果となった。(図4)

つまり、「古文は不要だ」との回答は、生徒が古文の学習を「普段の生活や社会生活の中で役に立つ」とは思っていないことの表れであると考えられる。

では、実際の古文の授業における生徒の取組を見てみると、「意欲的に取り組めた学習内容」としては、「話の内容(30.8%)」や「歴史的仮名遣い(18.6%)」、「音読・朗読や暗唱

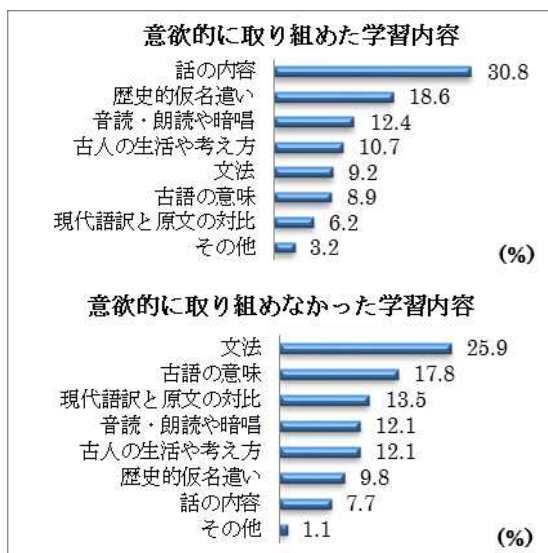


図5 学習内容による生徒の意欲

考えられる。

そこで、より生徒の興味・関心に応じた教材を提供するため、「古文の授業で学んでみたい内容」を調査したところ、図6のような結果が得られた。上位の回答は「愉快なもの(12.5%)」、「不思議なもの(11.3%)」、「恋に関わるもの(10.5%)」、「恐ろしいもの(9.8%)」の順であり、この4項目に合わせて4割以上の回答が集中した。

もちろん、生徒の興味・関心だけをもとに扱う作品を限定することはできないが、少なくとも入門期の生徒に対し、古文に親しみをもたせるための授業を行うときなどには、生徒の興味・関心に沿った作品を中心に扱うことが有効だと考えられる。

キ 課題と仮説

国語科の新学習指導要領でも述べられているように、これからの時代に求められているのは「伝統や文化の継承・発展」、「古典に親しむ態度の育成」、「言語文化に対する興味関心」といった、いわば「古典を重視した教育」である。それに対し、本調査から浮かび上がってきたのは、「古文は難しい。」、「古文はおもしろくない。」、「古文は必要ない。」といった「古文嫌い」の生徒が数多く存在しているという現状である。この現状を踏まえたとき、結果として「古文嫌い」の生徒を数多く生み出してしまった、従来の「訓詁注釈を目的とした、指導者からの教え込みが中心の学習」を見直すことが、これからの古文学習には何よりも必要であると考え。そして、本調査結果を反映し、「作品の内容」や「生徒の主體的な学び」を重視した授業展開や教材を工夫することが、これからの課題であると考え。

そこで、従来の授業にありがちな「一方的に与えられた教材に向き合い、文法や古語の意味を覚え、現代語訳、内容読解をして終わる」というパターン化された学習ではなく、「自らの興味・関心に従って自らが学びたい作品を選び、作品の内容を中心に、主體的な学習をする」ことができれば、生徒は古文に対する興味を深め、親しみをもって学習に取り組むの

(12.4%)」という回答が上位を占めた。反対に、「意欲的に取り組めなかった学習内容」としては「文法(25.9%)」や「古語の意味(17.8%)」という言語事項に関する回答が上位を占めた。(図5)

以上の結果は、前述した「古文の好悪の理由」とも重なるものであり、生徒は、「古語」や「文法」といった、古文を「理解するための基礎的・基本的な知識・技能」、いわば学習のための手段とも言える部分で意欲を失った結果、本来古文で味わってほしい「作品の内容の興味深さ・奥深さ」を知る前に、古文そのものを嫌いになってしまっているのではないかとすることが

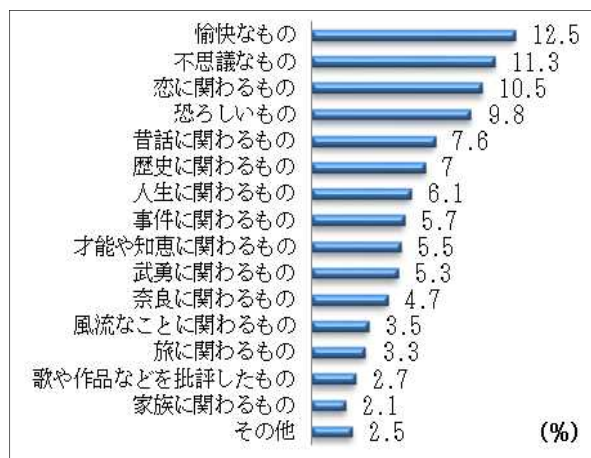


図6 古文の授業で学びたい内容

ではないかとの仮説をもとに、教材の工夫に取り組むことにした。

(2) 教材の工夫

生徒に学びたい作品を選ばせるとき、古文作品そのものを生徒に提示しても、古文学習の入門期の生徒や古文学習が不十分な生徒には、内容を理解することが難しい。したがって、生徒本人が作品を選ぶこともできなくなってしまう。そこで、生徒が作品を選ぶ上で参考に行ける「古文作品の紹介文」を作成し、それをデータベース化することにした。

ア 古文作品の収集

古文作品をデータベース化するに当たり、収録する作品は、原則として、高等学校の教科書に載っているものとした。さらに、全ての学年に対応できるよう、古文を扱っている「国語総合」、「古典」、「古典講読」の3科目の教科書、計65冊を作品収録の対象とした。

(注：詳細はデータベース参照)

イ 古文作品の分類とデータベース化

まず、収集した作品のそれぞれに「科目」、「テーマ」、「ジャンル」、「作品名」、「章段名」、「紹介文」の項目を設け、それぞれのデータをエクセルを用いて入力した。作成したデータベースの一例を下の図7に示す。章段数にして363作品、延べ数は、593項目である。

科目	テーマ	ジャンル	作品名	章段名	紹介文	
1	古典	歴史物語	『古事記』	「源佐之男命の大蛇退治」	源れん坊で有名な神、源佐之男命(すまのおのみこと)が、ある時、駒を盗む悪夫婦と出会いました。聞けば、彼を大蛇の生け贖に差し出さなければならぬとのこと。そこで、その大蛇退治を請け負った源佐之男命、彼は、 原典	
2	古典	恋に關わるもの	日記	『和泉式部日記』	「夢よりもほかなを世の中を」 恋人に先立たれ、恋しみの日々を送る和泉式部のもとに、彼の弟から歌が届きます。お互いに歌を交わし合うのですが、その歌が、とっても感嘆なんです。恋多き女性として有名な和泉式部が書いた日記の夏観部分です。 恋人に先立たれ、恋しみの日々を送る和泉式部のもとに、彼の弟から歌が	
3	古典	国語総合	才能や知恵に關わるもの	伝記	『折りたく紫の記』	「利根と氣根」 作者の新井白石は、政治家・学者として有名な人物です。彼は幼い頃から才能から、母は学者になりたいと思っていたのですが、ある時、人から「利根、氣根、黄金の三ごんがなくては学者になるのは難しい」と言われました。学者になるのに必要な「三ごん」とは何かわかりますか？
4	古典	古典講読	才能や知恵に關わるもの	回想録	『蘭氣事出』	「フルヘツヘンド」 江戸時代、オランダを經由して、ヨーロッパの文化や学問が日本に入ってきました。それが「蘭学」です。しかし、辞書もない時代、人々はオランダ語の頭取に懸懸苦悶しました。「フルヘツヘンド」…何のことかわかりますか？
5	古典	国語総合	才能や知恵に關わるもの	随筆	『花月草子』	「両頭の蛇」 昔、両頭の蛇というのがいると聞いた人が、2匹の蛇の馬を絡んで處へ放しました。この蛇は、幾時は前に進むことも出せず、一カ所でのたうっていました。どうするかとしばらく見守っていたところ、三日後には…、蛇はどうなったと思いますか？
6	古典	国語総合	不器用なもの	振名草子	『伊留保物語』	「鳩と蛇」 ある時、鳩が遊んでいると、急に水が出てきて鳩を押し流してしまいました。その時、水の上にいた鳩が…、どんな生き物も、要した事は忘れません。犬が主人の膝に上り、顔をなめると、主人はその犬を愛し、たいそうかわいがりました。それを見てうらやましく思った馬が、犬と同じように主人の顔をなめたところ…、主人がどうしたかわかりますか？
		国語総合	愉快なもの	振名草子	『伊留保物語』	「馬と犬のこと」 ある日、ねずみたちが集まって猪への対策を話し合った。「日頃、自分たちが常に捕まるのは、猪が足音や声をたてずに近づいたら、何かいい対策はないだろうか」と、ねずみたちの出した結論とは？
		古典	愉快なもの	振名草子	『伊留保物語』	「馬と犬の事」 ある犬が、肉をくわえて川を渡り始めました。ちょうど真ん中まで来たときのことです。影が水に映る姿を見て、自分の肉よりも犬をいと思った犬は…、インッパ物語でも有名なお話ですね。この話を覚えておきますか？

図7 データベースの一例

「科目」とは、古文作品を扱っている「国語総合」、「古典」、「古典講読」の3科目の別をいい、「テーマ」は、作品の内容によって分類した15種類を指す。そして、この15種類を前述の意識調査「古文の授業で学びたい内容」の選択肢として用いた。(図6参照)「ジャンル」とは、「物語」や「随筆」等に分類したものであり、「作品名」とは、その作品の題名を表している。「章段名」は、それぞれの章段につけられた見出しを表し、それぞれの章段に、その内容を紹介する「紹介文」を作成した。その際、単なるあらすじの説明に終わるのではなく、生徒がその作品を読みたくするような文章にすることを心がけた。

(3) 授業実践

ア 授業実践の指導計画

第1学年の「国語総合」で、古文導入期の授業実践を行うこととし、その指導計画を表1に示す。

第1時 各自が選んだ作品を、現代語訳によって学習し、発表し合う。

第2時 第1時に学んだ作品を繰り返し音読した上で、現代語訳との対比を行う。

第3時 第2時に行った、原文と現代語訳の対比をもとに、古語と現代語の関係を学ぶ。

表1 授業実践の指導計画

時	学習活動（指導のねらい）	評価規準【評価の観点】	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 古文の現代語訳を読んで、その内容を整理する。 整理した内容を発表する。 発表された内容を聞いて、それぞれの作品の内容についてまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各自が選んだ作品について、話の筋を理解し、ワークシートにまとめている。【関心・意欲・態度】【読む力】【書く力】 まとめた内容を、わかりやすく発表しようとしている。【話す・聞く力】 聞き取った内容を整理し、ワークシートにまとめている。【話す・聞く力】【書く力】 	<ul style="list-style-type: none"> 授業態度の観察 発言の確認 ワークシートの確認
2	<ul style="list-style-type: none"> 古文のリズムに親しみながら、原文を音読する。 原文と現代語訳を対比する。 	<ul style="list-style-type: none"> 読み仮名を参考にして、積極的に音読しようとしている。【関心・意欲・態度】 ワークシートを活用して言葉を整理している。【関心・意欲・態度】 古語の切れ目を理解している。【知識・理解】 	<ul style="list-style-type: none"> 授業態度の観察 発言の確認 ワークシートの確認
3	<ul style="list-style-type: none"> 原文と現代語訳の対比をもとに、古語と現代語の関係を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 古語と現代語を対比させて、ワークシートに記入している。【関心・意欲・態度】 ワークシートを活用して、現代につながる古語や意味が変化した古語などを整理し、意味を理解している。【知識・理解】 	<ul style="list-style-type: none"> 授業態度の観察 発言の確認 ワークシートの確認

イ 授業実践

(7) 対象：奈良県立奈良情報商業高等学校 第1学年 118名

(4) 期間：平成23年10月26日～31日（3学級×3時間 計9時間）

(7) 題材：入門期の古文（『宇治拾遺物語』『今昔物語集』『沙石集』『伊勢物語』『徒然草』）

(I) 授業の実際

授業では、事前に八つの作品の紹介文を載せたワークシートを配布しておき、生徒に、これからの授業で学ぶ作品の一つ選ばせておいた。そのことにより、生徒は、自分の興味・関心のある内容を学ぶことができるので、授業に対する集中力が高まった。（図8）

第1時では、現代語訳から作品を学ぶことで、生徒はまず内容を理解し、積極的に学習に取り組んでいるようであった。また、各自が学んだ作品を発表し合うことで、それぞれ

の作品のよさを味わい、作品の魅力を語り合う姿が随所に見られた。その結果、授業の終わりに、一番良かった作品は何だったかを聞いたところ、最初に自分が選んだ作品以外を挙げた生徒の割合は、70.3%に上った。これは、お互いの学び合いにより、生徒自身がより

○決められた古文の話勉強するんじゃなくて、自分が選んだ古文の話学習できるところがよかったです。
○今回は、自分の好きな話を選んで勉強できたので、楽しくできました。教科書にある一つのものではなく、みんなが自分で選んだものを勉強するのはいいなと思いました。
○選んで学べるのはいい方法だと思います。
○恋の話だと話の展開に興味が出る。自分の好きな話だといふと思う。

図8 授業の感想

興味・関心をもてる作品に出会えたと感じたことを示すと考える。

第2時では、本文の音読を徹底し、発表し合うことで、古文のリズムに親しむことを目標とした。生徒は、音読自体に対しては、嫌悪感がそれほどないようで、お互いに楽しそうに発表し合っていた。さらに時間の後半には、原文と現代語訳を対比させ、言葉の切れ目で区切らせた。これは、第3時の授業で行う古語と現代語の比較で用いることになる。このあたりから、生徒間の学習速度に差が出始めたが、今回は、自分のペースでよいから、主体的に学習することを目標とした。

第3時では、原文と現代語訳を対比し、古語と現代語の関係性を学ぶことを目標とした。特にこの時間では、古語と現代語を比較する中で、古語と現代語の共通点や相違点、また、頻出助動詞の働き等について、生徒自身に気付かせることを目標とした。言葉を整理し、比較することで、古文は決して外国語などではなく、現代に受け継がれ、今に息づくものであることを学んで欲しいとの考えから、本時の授業を行った。しかし、古文が嫌いな生徒には、やはり難しく感じられたようで、授業後の感想には、「古文はやっぱり難しい。」や「しんどかった。」、「めんどくさかった。」といった声が寄せられた。

今回は、3時間という限られた時間での取組となったため、1時間当たりの学習内容が多くなってしまい、生徒への負担が大きかったように感じている。また、日頃から受け身の授業に慣れている生徒の中には、発表の機会が多い授業の在り方が嫌だと感じた者もいたようである。ただ、今回は、授業でデータベースを活用する一方法としての提案であり、生徒自身が学びたい作品を選んで学習するという方法に関しては、前掲の表2にあるとおり、概ね好意的に受け止められたようである。

(4) 事後の意識調査

ア 調査の趣旨

6月に実施した事前の意識調査と今回の授業実施後に行った事後の意識調査との二つの結果を比較することにより、授業の効果を検証する。

イ 調査対象

奈良県立奈良情報商業高等学校 第1学年 118名

ウ 調査実施期間

平成23年11月1日～平成23年11月2日

エ 調査内容

高校生の「古文」に関する意識調査

オ 調査結果と考察

まず、「『古文』が好きか」という問いに対して6月の段階では、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた者が、合わせて16%であったのに対し、11月の段階では、11%と、肯定的な答えが5ポイント減少している。それに対し、「嫌い」と答えた者は、6月の54%から11月には48%へと、これも6ポイント減少している。つまり、全体としては、「どちらかといえば嫌い」と答えた者が、30%から41%へと、11ポイント増加しており、極端に嫌いという者が、若干は減ったものの依然として、どちらかといえば古文は嫌いであるという者が多いことを表している。(図9)

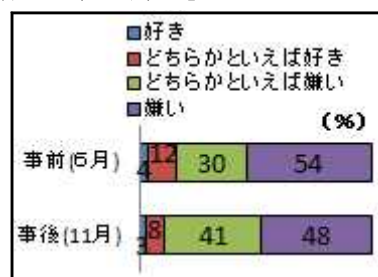


図9 古文の好悪

これは、6月の調査の段階ではまだ、高等学校での古文の授業を経験していなかったが、11月の調査のときにはすでに、高等学校での古文の授業やテストを経験していたことが、大きく影響しているのだと考える。

それに対し、「『古文』の学習が必要だと思うか」という問いに対してはどの項目に関しても、2%前後の増減に留まっており、これは人数にすると2~3人に相当する。したがって、全ての項目に関して多少の数値の違いはあるが、差異があるとは考えにくい。つまり、高等学校で十数時間の古文の授業を経験し、今回の3時間の授業を経験した後も、生徒の「古文に関する要・不要の意識」には、ほとんど変化は見られなかったといえる。次いで、「『古文』が好き・どちらかといえば好き」と回答した者にその理由を聞いたところ、明らかに数値の変化が見られたのが「作品

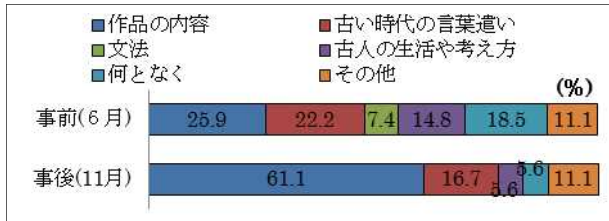


図10 古文が好きな理由

の内容がおもしろいから」という回答であった。これは、6月の調査では25.9%であったのに対し、11月の調査では、61.1%と35.2ポイントも増加しており、実に2.4倍の増加であった。(図10)これは、今回の3時間の授業が、まずは作品の内容を中心に取組をした結果であり、後の「意欲的に学べた内容・学べなかった内容」の結果とも一致するものであった。つまり、生徒は、古文で扱われている作品の内容そのものに関しては、むしろ好意的に捉えていると言える結果となった。

反対に、「『古文』が嫌い・どちらかといえば嫌い」と回答した者にその理由を聞いたところ、事前と事後での大きな変化は見られなかった。その中で変化が大きかったものとしては、「何となく」と回答した者が10.5ポイントの増加で16.6%、「作品の内容がおもしろくないから」と回答した者が8ポイント減少して10.3%、「古人の生活や考え方がおもしろくないから」と回答した者が6.2ポイント減少して9.7%という結果であり(図11)、この結果からも、「作品の内容」そのものについて嫌いという意識を抱いている生徒は減少していることが分かる。

さらに、この結果を裏付けるものとして、古文の授業で「意欲的に取り組めた学習内容」を聞いたところ図12のような結果が得られた。それによると、11月の調査では、約4割の生徒が「話の

の内容がおもしろいから」という回答であった。これは、6月の調査では25.9%であったのに対し、11月の調査では、61.1%と35.2ポイントも増加しており、実に2.4倍の増加であった。(図10)これは、今回の3時間の授業が、まずは作品の内容を中心に取組をした結果であり、後の「意欲的に学べた内容・学べなかった内容」の結果とも一致するものであった。つまり、生徒は、古文で扱われている作品の内容そのものに関しては、むしろ好意的に捉えていると言える結果となった。

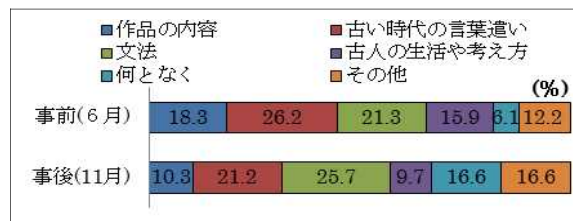


図11 古文が嫌いな理由

内容」と回答しており、6月の調査の2倍近くの数に上った。このことから、「作品の内容」については好意的な生徒の姿勢がうかがえる。逆に、「歴史的仮名遣い」や「音読・朗読や暗唱」に対しては、意欲的に取り組めた生徒の割合が低下しているが、これはどちらも、1学期の学習ですでに力を入れた取組がなされていたため、今回の授業では特に意識的に取り組まなかった結果であると考えられる。反対に、「意欲的に取り組めなかった学習内容」として「話の内容」を挙げた者は、11.3%から3.9%へと7.4ポイント減少しており、ここからも

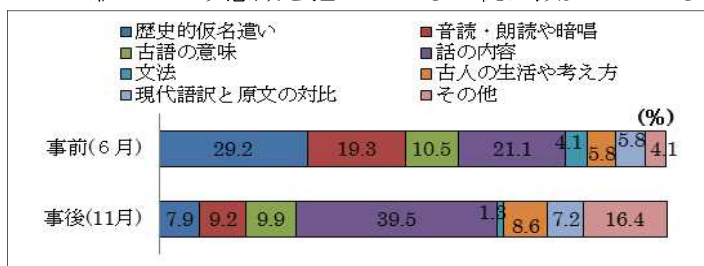


図12 意欲に取り組めた学習内容

同様の結果がうかがえる。

5 研究結果と考察

最後に、今回の授業が生徒に与えた影響を調査したところ、全体で51%と約半数の者が、今回の授業では、「古文に関する学習意欲はあまり変わらなかった」と回答している。これは、今回の授業が3時間だけの取組であったことを考えると、やむを得ない結果ではないかと考える。

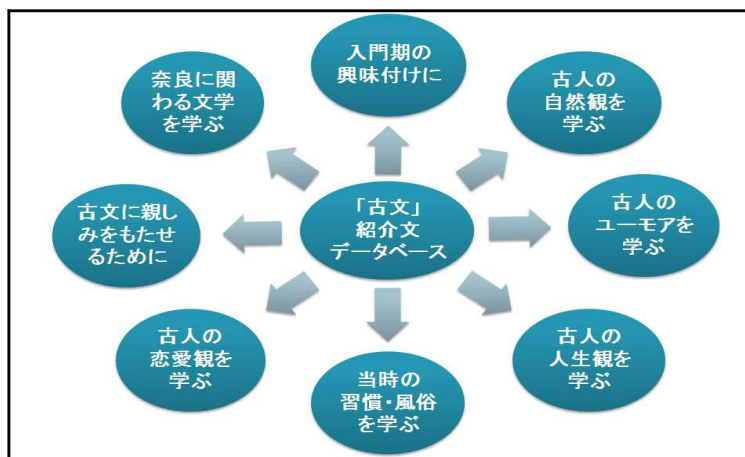
ただ、41%の者が、「かなり・少しは古文の勉強に興味がわいてきた。」と回答していることを考えると、今回の取組には意味があり、一定の効果があつたと考えたい。(図13)

調査の最後には、自由記述で各自の感想や意見を書いてもらったのだが、特に「古文の勉強に興味がわいてきた」と回答した者の多くが、「話のおもしろさ」や「授業の楽しさ」をその理由として挙げていた。中でも「自分で学習する作品を選ぶ」ことに関しては、肯定的な意見が多く、否定的な意見は見られなかった。ただ、「かえって意欲がなくなった」と回答した者が8%おり、彼らの多くは、発表形式の授業が嫌いだということを理由に挙げていた。これは、今後ますます、授業における言語活動が重視されることを考えると、今回の研究主題と大きく関わるものではないものの今後の課題の一つであると考えられる。

以上のことから、生徒が主体的に学習に取り組む授業を継続して行うことは、古文に親しみをもたせるためには効果的であると考えられる。そこで、今後は、入門期の生徒だけでなく、様々な段階の生徒に「自ら学習する作品を選ぶ」ことから古文の学習に取り組ませたい。そのためには、今回用いたデータベースが、有効に活用できると考えている。

その活用方法としては、例えば、『徒然草』や『枕草子』などの随筆作品からいくつかの作品を生徒に選ばせ、それをお互いに学び合うことで「古人の自然観を学ぶ」という授業展開などが考えられる。さらに、当時の庶民の生活が赤裸々に描かれた『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』などの説話を学ぶことで「古人のユーモアを学ぶ」や「当時の習慣・風俗を学ぶ」という授業を展開することも可能である。

表2 データベースの活用法



他にも、『伊勢物語』や『源氏物語』などから「古人の恋愛観を学ぶ」であったり、「奈良に関わりの深い文学を学ぶ」ことで、より古文を身近なものとして捉えたりすることができるような授業展開なども考えられる。(表2)さらに、授業で展開せずとも、データベースそのものを生徒に示し、自由に作品を選ばせ、休業日の自主課題として学ばせるといった方法も考えられる。このように、授業展開を変えることで、データベースには多様な活用方法が考えられる。

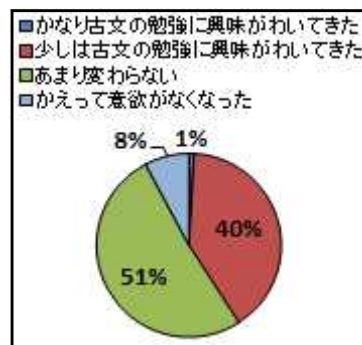


図13 学習意欲

6 おわりに

本研究では、古文に親しみをもたせるための教材の工夫を行い、その活用の一例として、古文入門期の生徒に対する授業実践を行った。その結果、「生徒自身が学びたい作品」を決定し、学習することは、作品への興味・関心を高め、古文に親しみをもたせるために有効な方法であることがわかった。また、授業では、現代語訳を活用し、作品の内容から古文を学ばせたことで、生徒は、まず古文作品の興味深さや奥深さに出会い、より親しみをもって作品に接することができたのではないかと考える。

一方、生徒に作品を選ばせた結果、授業では複数の作品を同時に扱うことが求められ、そのことが、必然的に教員の負担を増大させてしまうのも現実である。さらに、生徒にとっても、授業内容が煩雑になり、未消化のまま次へ進まざるを得ない場面が見られた。しかし、扱う作品数を減らしてしまうと、彼らの興味・関心に応じた作品が提示できなくなる可能性があり、結果として彼らの選択の幅を狭めてしまうことにもなりかねない。生徒からは、「複数を一気にやらずに、多数決をとって一つにしぼってやる方がいい。」といった意見も見られることから、学級の実情に応じて扱う作品数を見極める必要がある。

また、現代語訳からの学習に対しても「古人の生活にも興味深いものがあるというが、それなら現代語訳を読んでいる方が適していると思う。」といった意見もあり、作品の内容に対しては一定の興味・関心を示してくれた生徒に対し、古文そのものを学ぶ意義をどう伝えていくのかという課題が浮き彫りになった。

では、古文を学ぶ意義とは何であるのか。それは、日本語のもつ美しさや豊かさに気付き、時代の流れとともに語り伝えられてきた歴史の重さを知ることではないかと考える。それとともに、古人の生活や考え方、自然に対する鋭い感性や畏怖の念などを知ること、今一度、豊かな生活とは何かを自らに問いかけて欲しいと考える。

さらに、生徒の興味に訴えることは、「学習意欲を育むための内発的動機づけ」の1つであることから、今後は更に、生徒に芽生えた「興味」を「学習意欲」にまで結びつける方法を模索していきたい。

「古典」の学習は、これからの国際社会においてますます重要になると思われる。「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する」観点から、生徒自身が古典を楽しみ、学ぶことの喜びを体験できるような教材の研究に更に励んでいきたい。

参考・引用文献

- (1) 中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」
- (2) 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』
- (3) 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版
- (4) 文部科学省（2008-2010）「平成20年度－22年度 全国学力・学習状況調査 集計結果」
- (5) 奈良県教育委員会（2009）「高校生の学校生活などに関する意識調査」
- (6) 国立教育政策研究所（2004）「平成17年度 高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点（国語・国語総合）」
- (7) 梶田叡一（2003）「学習意欲を持たせる4つの動機づけ（講演会記録より）」『VIEW21 [中学版]』2003年9月号 BENESSE教育研究開発センター